

学習院アーカイブズ ニューズレター

Gakushuin Archives Newsletter 2018.7.15 vol.

12



学習院游泳記念 絵はがき (明治42年)

学習院の夏の游泳教育は、沼津では大正2年から現在に続いているが、明治13年からは両国の中洲、明治24年からは片瀬に於いて行われていた。自然の中での教育を重視した歴史は脈々と受け継がれてきたものである。初等科に遺された明治42年度の「游泳記録」には、記念に作られた洒落た絵はがきも見ることが出来る。

Contents

学習院光徳小屋について		
山桜会 (山岳部OB会)	秦野 郁郎	2
桜友会アーカイブズの活動と展望		
学習院大学 講師	林 東洋	4
学習院アーカイブズの設立まで		
学習院アーカイブズ	桑尾光太郎	6
主な活動 (2018年2月～5月)		8

学習院光徳小屋について

山桜会（山岳部OB会） 秦野 郁郎
 (昭和47年大理化卒)



豊かな緑に囲まれた三代目日光光徳小屋（平成30年5月撮影）

学習院輔仁会山岳部は来年2019年に創部100周年の記念の節目となります。日本での近代登山は学生登山から始まったと聞きますが、これだけの歴史を持つ学校は慶應義塾を筆頭に数校と思われまゝ。しかもその主役は大学生ではなく旧制の中学・高校生でした。13歳～17歳の中学生、18歳～20歳の高校生が日本の近代登山の黎明期を担っていたことは驚きです。

さらに遡る明治20年ころから学校登山が盛んに行われていたことが輔仁会雑誌に記録として残っていました。学習院は創立初期のころから校外教育が盛んだったと思われまゝ。元気な子供たちが自分たちの隠れ家（城）としての山小屋を求める気持ちが出てくることは自然の成り行きでした。

昭和5年ころから冬のスキー練習にと山小屋設置の検討が始まり、山岳部員原口兼義氏の父君が帝室林野局におられ、奥日光光徳というひなびたところがあるとの情報にさっそく調査を開始し、昭和12年には部長先生・卒業生・現役も加わり調査が続き、営林局・建築家などの調査を経て候補地に決定。建設エリア300坪程の熊笹藪の刈り取りと50坪の土地の地ならし整地に現役中・高等科生が顧問の先生と勤労奉仕に出かけました。昭和14年8月9日に地鎮祭を実施。建築家堀越三郎氏の設計、地元赤坂組による工事実施の結果昭和14年11月に竣工。50坪2階建

てのがっちりした造りの「光徳小屋」が完成しました。

1階には大きな薪ストーブが据え付けられ2階には畳と障子がついた和室がありました。管理人は居らず鍵は光徳牧場に預けられていました。このころは時局の悪化も感じさせず山岳部員にとどまらず同級生や家族・知人・友人等が訪れていました。小屋の看板は17代院長山梨勝之進氏の直筆で、院長は小屋に直接取り付けたいと原口部員と出向き、小屋の素朴さをほめられていました。昭和16年後半からは戦時体制になって小屋も環境が悪くなり、什器備品の損傷・不足、食料も配給となり苦しく、訪れる人も減りました。昭和20年8月15日に終戦。直前の10日に奥日光湯元南間ホテルに疎開中の皇太子殿下（当時）が小屋においでになられ、その後も何度かお立ち寄りになられています。動員先から戻って小屋を訪れる人も出てきました。



左) 初代光徳小屋（昭和14年11月竣工）
 右) 伝 第17代山梨勝之進院長揮毫の看板



昭和25年11月から管理人（奥山文雄氏）が常駐することとなりました。翌26年4月23日、煙突の接続部のズレから出火し、初代小屋は全焼してしまいました。奥山氏の必死の努力のおかげで小屋日誌の消失だけは免れました。小屋を山登りの根拠地とし、心の故郷とした人たちのショックは計り知れないものでしたが、直ちに小屋再建委員会が設けられ資金募集が始まりました。再建寄附芳名録によると山桜会はもとより皇族・卒業生・企業等から164件・

725,250円（現在に換算すると約4千万円か？）が集まり学校や桜友会等の協力もあり、初代より少し小ぶりですが二代目の小屋を昭和26年11月23日に竣工できました。2階建て30人定員の小屋で設計は大林組猪瀬善三氏、施工は宇都宮斎藤工務店でした。翌年8月9日安倍能成院長が来舎され「山静似太古」の額をいただきホールの壁に取り付けました。このころは小屋に電気はなく水も裏の水源からの流水で、台所の奥の水槽に流しっぱなし。洗面は表の小川、トイレは和式のぽっちゃん汲み取り式。照明はランプで暖房は各部屋に薪ストーブ、燃料はプロパンガス。歌舞音曲・ラジオ・楽器は厳禁。痛飲・高歌放吟は可、と不便で暗いイメージでしたが、下界の喧噪の中で暮らしていると光徳の自然の美しさと静けさが人を虜にする。何度行ってもまた行きたくなりひきつけられてしまう。利用者のリピートが増えていったようです。学校や管理人さんの対応も大らかで奥山さんがいるから光徳に行きたいという人もいました。昭和30年代に入り、登山・スキー以外にも新しいアウトドアのクラブも生まれ、ますます盛んになりました。



二代目光徳小屋（昭和26年11月竣工）

私が光徳小屋に初めて行ったのは昭和43年4月でした。高校でワンゲルをかじったことで入学後山岳部に入り、新入生歓迎で小屋に行きましたが、故郷の南房州と似ており一目で気に入りました。ランプの一晩後、男体山北側を歩いて日光駅までも苦にならず、途中での鹿との出会いが忘れられませんでした。山岳部では「小屋係り」になりました。二代目の小屋では電気がなく、ランプのホヤ磨きで1日が始まります。朝食が終われば布団干し・薪割・ゴミ穴掘り・ゲレンデの草刈り。夕方には薪ストーブを焚いて暖房準備。ランプの油さしも。後は来客と談笑。夏休みはあつという間に終わっていきました。4年間の小屋係りも終わり私は社会人に。

小屋との接点の無いまま20余年、平成6年に突然連絡が来ました。「光徳小屋が閉鎖の危機……」と。

小屋の状況を聞いて愕然。私が現役でいたころは毎年3,000人近い利用者がいました。週末になると30人の定員を超える利用者が小屋に押しかけ、特に学生さんは1泊のささやかな集いですがそれでも夜を惜しむかのように歌い語っていました。1つの布団を交代で休むこともありました。蚕棚のベッドは一畳で定員を超えた分は料金は不要でした。研究室やゼミ、各クラブの活動などが毎週のように争って集い食事を作り楽しんで帰られました。当時は沢山の利用があり、順調に運営されていました。

その後小屋は老朽化し、昭和55年に三代目の小屋が再建されましたが、そのころから利用者の漸減が見られるようになりました。小屋の維持管理費用は学生生徒等納付金でも賄われているため、学校としてもこの状況では閉鎖も辞さずとのこと。原因は種々あり可能な点は改善努力をしましたが、昭和40年代の盛況を取り戻すところには届いていません。

平成6年に閉鎖の危機との連絡を受けてから、私は20年近くOB会の小屋係りとして奔走し、長年の課題であった狭いトイレは今春やっとウォシュレット化を果たしました。若い人たちには、小屋もきれいで使い勝手が良くなったと喜んでもらえるでしょう。これからも学生・生徒さんが沢山集う光徳小屋になるよう微力を尽くします。

山岳部OB石川貞昭氏の美しいスケッチ



男体山

二代目小屋



二代目小屋テラスにて石川貞昭氏（故人：昭和30年大政治卒）
昭和27年7月撮影

※学習院光徳小屋利用にあたりましては、学習院施設部施設課へお問い合わせください。（ホームページ参照）

桜友会アーカイブズの活動と展望



学習院大学 講師 林 東洋

1. 桜友会とは

学習院桜友会は、学校法人学習院が設置する幼稚園から大学・女子大学まで、全ての学校に在籍した人々が集う同窓会組織である。官立時代の学習院・女子学習院の出身者、学習院女子大学に改組される以前の短期大学の卒業生、大学院・専門職大学院のみに籍を置いた人々、また女子教養学園の出身者も会員資格を有し、会員数13万人を大きく超える規模で活動している。

桜友会本部においては、会員総会・社員総会のほか、毎月第2木曜日開催の月例会、毎年4月開催の〈オール学習院の集い〉、さらに〈伝統文化にふれる会〉、〈特別フォーラム〉、〈チャリティーチェリーパーティー〉のほか、ゴルフ大会・旅行会など様々な活動が展開されている。多岐にわたる活動を支えているのが、本部に設置される14の委員会（2つの特別委員会を含む）である。全国支部・海外支部の組織も充実しているが、学習院が東京にキャンパスを置く学校であることもあり、とくに関東近県の組織の活動が盛んである。また、幼稚園から大学・女子大学までの学校・学部同窓会、職業・企業別の職域桜友会、課外活動の部・サークル別の輔仁会OB・OG会が存在する。

広報の面では、年2回の『桜友会報』刊行とホームページの更新を中心として、メールマガジンで速報性を高めるという方式を採っている。本稿で紹介する〈桜友会アーカイブズ〉も、広報委員会が担当する活動の一つである。

2. 桜友会アーカイブズ 設立の経緯

平成20年に、学習院大学に大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻が設置された。さらに平成23年に院史資料室が学習院アーカイブズへ改組されることを踏まえて、桜友会内部とくに情報発信広告委員会（現在の広報委員会）において、「桜友会も資料の収集・保存に注力すべきではないか」という意見

が出されるようになった。議論を重ねたのち、桜友会単独で実施するのは人員や技術の面で困難なため、学校側と緊密に連携して専門家の指導を仰ぐべきであろうという結論に達した。これを受けて平成22年12月に、学校側の教職員と桜友会側の役員等、計7名による会談が行われた。席上で、桜友会アーカイブズの活動を開始し、必要に応じて専門知識を有する教員が協力する、との合意がなされ、実務は情報発信広告委員会（広報委員会）が担当することが確認された。

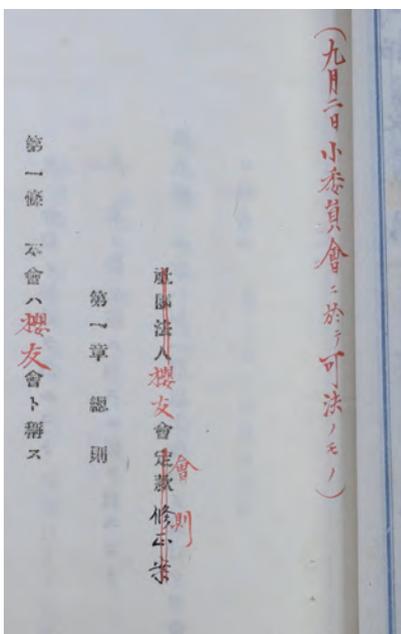
3. 活動の実際

桜友会アーカイブズの枠組みは整ったものの、専門的な知識と技術を備えた人員を確保しなければ、活動を展開することは難しい。各々多忙な会員がボランティアで参加する同窓会組織の限界もあり、3年間ほどは議論が中心で、実際の作業に着手することはかなわない状況が続いていた。そのような中、平成26年に金子元氏（現在、順天堂大学ほか講師）が広報委員会に参加してから、事態は大きく進展した。金子氏は当時、学習院大学国際研究教育機構（現 国際センター）に在籍するかたわら、東京女子大学の丸山眞男文庫のデジタルアーカイブ構築や、国立国会図書館憲政資料室の近現代政治史に関する資料受け入れに従事する人物であった。同氏の奔走と国際研究教育機構の村松弘一教授（当時）の厚意により、同機構が保有するブックスキャナーを使用してアーカイブ作業を実施する方向で調整が進んだ。一方で、大学院アーカイブズ学専攻の保坂裕興教授の取り計らいにより、保坂教授の指導下にある大学院生が作業に参加する体制が整った。これにより、作業の場所・設備・人員の全てが揃って、本格的な活動開始にこぎつけることができたのである。以来、金子氏の指揮のもと、大学院生の和田直大氏・奥沢麻里氏・片岩真由氏が実作業に従事し、桜友会所蔵資料のデジタルアーカイブ化が着々と進行して

きた。

4. アーカイブ作業の進捗状況

桜友会が保有する資料のうち、会の設立の経緯について記す重要なものは「桜友会準備記録」と題されたファイルに収められている。内容は、設立前の大正9年5月から設立直後の翌10年1月までの大小の会合の出席者名簿、回覧書類、議事録、案内状、書簡、当時の新聞記事の切り抜き等である。一連の記録によれば、木戸幸一が起草した会則案をもとに議論を重ね、大正9年9月2日に「桜友会」の名称が決定したことがわかる（写真①）。また定期刊行物としては、大正10年からの『桜友会会報』、昭和42年～45年の『桜友会 草上会』、昭和33年から現在まで



写真① 「桜友」の書き込みがある会則案

続く『桜友会報』（写真②）、平成4年～8年の『桜友クラブ』、平成8年～17年の『Oblige』などが保存されている。これらの資料のデジタル化作業は、撮影に関してはほぼ終了している。今後は、資料の原本を保存性に配慮した封筒や箱などに分けて保

管して、撮影したデータをPDFなどの扱いやすいファイル形式に変換し、閲覧しやすいように目次や見出しをつけていく作業となる。いずれにせよ、アーカイブズ学専攻の保坂教授の指導と人員の斡旋を受けながら進めていくことになる。

5. 課題と展望

桜友会は学習院目白キャンパスの創立百周年記念会館の2階に事務局を置き、そこに専従のスタッフ数名が勤務している。しかし、スタッフは資料の収集・保存に関する専門技術を有しているわけではなく、資料保存に適した収蔵スペースの確保も困難なため、日々の同窓会活動から生み出される事務文書以外の資料は収集すら覚束ないのが現状である。桜友会の会員には、貴重な資料を保有しているが、今

後の扱いに苦慮している人も少なくないと聞く。『桜友会報』や桜友会ホームページで資料の提供を広く呼び掛ければ希少な資料が集まることも期待できるが、桜友会アーカイブズの現況としては十分な受け入れ体制が整っているとは言い難い。この点では、専門的能力を有する学習院アーカイブズの協力を仰ぐことが必要になってくるだろう。

桜友会アーカイブズは、桜友会が平成23年に設立90周年をむかえ一般社団法人となったことを機に始められた活動の一つである。今後は、3年後の設立100周年に向けて目に見える形での成果が求められてくる。具体的には、過去の『桜友会報』のデジタルアーカイブの公開や、平成2年刊の『桜友会史』に続く記念誌の刊行といった100周年記念事業に参画していくことになるだろう。

より長期的な視点に立てば、学校法人の機関である学習院アーカイブズとの連携を強化し、効果的な〈役割分担〉をしていければ最上であろう。資料提供の呼び掛けなどに関して、桜友会アーカイブズが果たせる役割は大きいと考えられる。「我々は何であるのか」というスクールアイデンティティの確認・再生産のために、今後も学内の諸機関と協力を進めていく方針である。



写真② 『桜友会報』第1号（昭和33年10月）

学習院アーカイブズの設立まで

学習院アーカイブズ 桑尾 光太郎

1. 百年史編纂と史資料の収集

学習院アーカイブズの設立は2011（平成23）年だが、所蔵している歴史資料の大半はそれ以前に学習院史の編纂を通して収集されてきた。その経緯は不明な部分も多いが、こうした史資料がいつ・どのように集められ利用されてきたかを可能な限り振り返ってみたい。

学習院史の編纂は創立記念事業として行われ、古くは『開校五十年 学習院史』（1928年）、『女子学習院五十年史』（1935年）などが刊行された。その後、元教員や卒業生の寄稿を集めて『学習院物語』の編纂が進められたが、1942（昭和17）年に時局悪化のため稿本の段階で中断している。戦後も院史編纂が企画され、その際に作成されたガリ版刷りの稿本や座談会原稿などが残されているが、いずれも刊行までには至らなかった。創立八十五周年記念式典が挙行された1963（昭和38）年には、図録『学習院の歩み』が刊行された。その「あとがき」で児玉幸多学習院史編纂委員会委員長は、「卒業生・現旧教職員・縁故者、その他の心からの御助力によって、古い写真や記録が集められ（略）いずれ後日に、さらに詳細な院史が編纂される予定であるから、それらの資料を十分に利用したい考えである」と記している。



宮内庁から移管された公文書

同じ1963年には旧宮内省が学習院・女子学習院を所管していた時期の公文書267件が、宮内庁書陵部

より学習院に移管された。「式事録」「土地建物録」「例規録」「進退録」ほか官立期学習院・女子学習院の実態を調べるには欠かせない基本文書であり、現在学習院アーカイブズに保管され閲覧に供する機会が多い。

1970年代から80年代にかけては、学習院百年史編纂が進められた。1972（昭和47）年に百年史編纂委員会が発足し、児玉幸多委員長はじめ昭和戦前の官立期から在職している各校の教員や、大学史学科の日本史専攻教員などが委員をつとめた。大学図書館内に百年史編纂室が設置されて（のち北1号館1階に移転）、専従のスタッフも配属され編纂実務を担った。編纂委員会は積極的に資料を収集する方針をとり、文書資料や写真の収集・複写および整理、元教職員や卒業生等へのインタビュー・寄稿依頼、座談会の企画開催などを精力的に進めていった。このとき作成された資料情報などを記したカード類は、問い合わせ対応に現在も頻繁に参照されている。また在学・在職時の思い出が綴られた寄稿原稿や座談会筆記録が135点残されており、その記録自身が貴重な歴史資料となっている。

資料収集が大きく進展したとはいえ、その資料を使って原稿を執筆し歴史叙述として水準の高い刊行物にまとめていくには、多くの困難がともなったようだ。当初は創立百周年を迎える1977（昭和52）年度に『学習院百年史』全三編を刊行する計画であったが、第二編は1980（昭和55）年3月、第一編は1981年3月に刊行された。そして同月に百年史編纂室が解散し、「同編纂室で取り扱っていた学習院の歴史的資料の収集・整理・保存に関する業務」のため総務部庶務課に院史資料室が設置された。

残る第三編の編集は、院史資料室に配属された百年史編纂室の茅根英良氏により進められ、1987（昭和62）年3月に刊行された。ようやく百年史事業は終了したが、第三編には『百年史』刊行の経緯や執筆分担、編集後記等が掲載されておらず、院史資料室時代に作業がどのように進められたかの記録も残

されていない。その後、院史資料室は収集資料の整理や大学図書館から移管された乃木希典遺品資料への対応、外部からの問い合わせや資料の受け入れなどの対応を行っていた。

2. 大学五十年史編纂とアーカイブズ構想

1994（平成6）年、学習院大学五十年史編纂事業が開始され、筆者も実務を行うこととなった。仕事を始めてまもなく北2号館10階にあった院史資料室を訪ねた際、部屋中にぎっしりと資料や書籍が詰め込まれていたことが印象に残っている。

同年9月、院史資料室は北1号館2階に移転し、隣接して大学五十年史編纂室も設置された。院史資料室には執務室と倉庫が置かれ幾分拡張したとはいえ、資料の保存スペース・環境は両室とも不十分であった。院史資料室が所蔵する大学関係の史資料や写真類は茅根氏の配慮で速やかに大学五十年史に貸し出され、旧制学習院時代の史資料も自由に利用することができた。茅根氏は1996（平成8）年に退職し大学五十年史にはさほど関わらなかったが、百年史編纂という大事業の実務を担っただけあって史資料の整理や保管は詳細かつ正確に行い、腕の良いアーキビストであったことは疑いない。

他方で大学五十年史編纂室には事務倉庫から未整理の古い文書群が運び込まれ、整理と仮目録の作成が開始された。その中には戦後初期に学習院が宮内省から離れて財団法人に改組された時期の文書や、1949（昭和24）年の大学開学時の教務関係文書などが多く含まれていた。酸性劣化が進んだガリ版刷りのわら半紙を注意深く手に取り、目録を採って中性紙封筒に収納する作業を続けていくうち、「大学の歴史をどう表現するか」についてのアイデアが少しずつ浮かぶようになっていった。

「大学五十年史」は同時代史であり、直近の出来事も叙述の対象となる。古い資料だけではなく各部署が保管している事務文書、大学案内や履修要覧をはじめとする刊行物などを見てまわり、どこに何があるかの把握を試みた。史資料の整理と保存・目録作成はいうまでもなくアーカイブズ構築に向けての基礎作業であるが、大学五十年史での経験は筆者にとって欠くことのできない出発点となった。

大学五十年史編纂事業は、図録『学習院大学の50年』と『学習院大学五十年史』上巻・下巻を刊行して2001（平成13）年10月に終了した。実務にあたった編纂室スタッフは同年度で退職し、収集・整理し

た史資料や作成したデータ等は院史資料室に移管された。事業終了に先立って、大学五十年史で収集・整理された資料と院史資料室所蔵資料とを保管し、あわせて各学校・部署に蓄積された非現用文書を受け入れ選別・保存を行う「アーカイブズ」設置の提案が行われ、新組織を検討するワーキング・グループが答申を法人宛に提出した。しかし実現には向かわずアーカイブズ設立構想は一旦頓挫した。

その後院史資料室は2004（平成16）年に旧理学部年代測定室に、さらに2007（平成19）年に現在学習院アーカイブズがある西5号館地下に移転した。この時期は担当職員が1名配置されていたとはいえ、度重なる移転もあって院史資料室としての機能が十分に果たせていなかった。しかしながら院史資料室という部屋が存続し、数々の編纂事業の過程で蓄積された史資料が散逸を免れてきたことの意義は大きい。紆余曲折がありながらも史資料の収集・整理・保存に苦心してきた先人の努力は継承され、新たに展開される可能性を残していたのである。

2007年10月に学習院理事会で承認された「『学習院新長期計画』の後半5年間の主要課題と展望」は、主要課題のひとつに「学習院の歴史と伝統を継承していくための展開」を掲げ、①本院の歴史に関する教職員・学生生徒・父母等の理解の促進と継承、②体系的な記録史料整理、保存システム構築の取り組み、③歴史的施設の保存活用と全院的な体制作りの検討、といった事業計画を発表した。この計画のもとに2008（平成20）年、「学習院アーカイブズ設立準備委員会作業部会」が発足し、2009（平成21）年2月、「過去と未来をつなぐ〈学習院アーカイブズ〉設立に向けて」を答申、上記の3つの役割を果たす全院的な機関としての学習院アーカイブズ設立を提言した。答申を受けて同年4月から院史資料室と併設する形で学習院アーカイブズ準備室が設置され、学内に保存される文書や史資料の実態調査を開始した。この間、『半世紀 学習院女子短期大学史』『学習院女子中等科 女子高等科125年史』の編纂などを通じて戸山キャンパスに残される史資料の調査や整理が進展し、史資料の保存と活用が学習院全体の課題として意識され始めた。そして2011年4月、院史資料室と学習院アーカイブズ準備室とが統合し、法人事務組織として学習院アーカイブズが正式に発足するに至った。

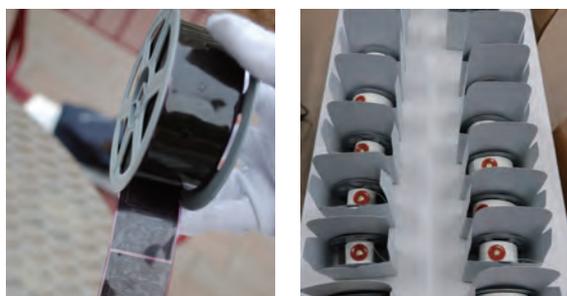
主な活動 (2018年2月～5月)

◆文書ファイルの整理・管理

- ①各事務部署における文書ファイル管理簿の作成・更新 (平成29年度作成文書ファイルの追加)
- ②事務部署における非現用文書ファイルの評価選別 (大学アドミッションセンター、大学図書館等)

◆文書・資料の調査・整理及び目録作成

- ①女子部史料室所蔵史資料の整理およびテキスト入力 (継続)
- ②大学学生センター所蔵マイクロフィルムの選別・整理・保存措置 (2月)



マイクロフィルムの保存措置

- ③旧昭和寮寄宿舎の見学調査 (2月26日)
- ④戸山キャンパス建造物について剛力重和学習院名誉教授聞き取り調査 (3月6日)

◆史資料のデジタル化・修復

- ①自動演奏ピアノの調律、院内所蔵ピアノの由来等調査
- ②戦後初期酸性劣化文書の修復 (継続)

◆史資料の受贈・購入

- ①女子学習院青山校舎絵はがき (2月)



明治神宮外苑 青山口児童遊園
(現在は明治神宮外苑テニスクラブ室内コート等)
後方に見えるのは、女子学習院の正門と本館 (昭和10年頃)

- ②学習院大学演劇研究会プログラム (昭和25年、吉村昭「或る幕切れ」) (4月)

◆教育支援・広報支援等

- ①女子部「高Ⅲ自由講座」での秩父宮ラグビー場 (女子学習院跡) 見学 (2月15日)、学習院アーカイブズ見学 (2月16日)
- ②辞令交付式講演「学習院の歴史—史資料からみる学習院の教育・キャンパス・学生—」(4月2日)
- ③広報課スタッフに対して「学習院の歴史」講義 (4月27日)
- ④「華ひらく皇室文化」展への資料貸し出し (3月～、名古屋・秋田・京都・東京での巡回展示)
- ⑤経済学部入門演習において「学習院の歴史」講義 (5月10日)

◆その他

- ①全国大学史資料協議会東日本部会への参加、明治大学 (3月)、國學院大学 (5月、創立30周年記念講演会・シンポジウム「大学アーカイブズの可能性」)
- ②学習院百周年記念会館3階展示コーナー 展示内容の一部変更 「目白・戸山・四谷キャンパスの移り変わり」パネル等 (3月)



百周年記念会館3階展示コーナー (航空写真パネル)

学習院アーカイブズ・ニュースレター第12号
2018 (平成30) 年7月15日発行

編集・発行 学習院アーカイブズ
Gakushuin Archives
〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1
TEL 03-5992-1285 (直通)
事務室 西5号館 (本部棟) 地下1階
<http://www.gakushuin.ac.jp/ad/archives/>